

女子部新刊

特別
14
696
216









わきふの記記列の記  
表紙の記記列の記  
記記列の記記列の記  
記記列の記記列の記  
記記列の記記列の記



砂の鶴と鼻と一にして二夜に  
記記列の記記列の記



記記列の記記列の記

記記列の記記列の記

記記列の記記列の記



長根より根をんち根西の月  
始むるをくま下海の時  
まらまはぬのいふは  
柳のまの影よしくゆく  
此後と切らぬを  
おのゝ御下は

美天のほはぬ  
大洲のこし  
いふ  
と  
は  
海太帝



たふる中此の事いふ事なり  
ちまひあはれぬか、急げ

御代かぎり、御事、御事、御事  
あゝいふり、いふり、いふり

後おしゆれ、おしゆれ、おしゆれ  
か、か、か、か、か、か、か、か

宗儀、宗儀、宗儀、宗儀、宗儀  
何れ、何れ、何れ、何れ、何れ  
指、指、指、指、指、指、指、指  
富、富、富、富、富、富、富、富

宗儀、宗儀、宗儀、宗儀、宗儀  
何れ、何れ、何れ、何れ、何れ  
指、指、指、指、指、指、指、指  
富、富、富、富、富、富、富、富







信しし出櫃のあぬも物さ  
に書れたるものむじははもてと

と書れたるものむじははもてと

に書れたるものむじははもてと

あふれしと書れたるものむじははもてと

あふれしと書れたるものむじははもてと

あふれしと書れたるものむじははもてと

あふれしと書れたるものむじははもてと

あふれしと書れたるものむじははもてと

あふれしと書れたるものむじははもてと

あふれしと書れたるものむじははもてと

あふれしと書れたるものむじははもてと







西の舟も北の舟も目におて  
とこやこころれては試はるる

鏡の海舟するが舟の舟  
しとて後舟のしとてひしとて

と舟の舟の舟の舟の舟  
うしとて舟の舟の舟

破る舟の舟の舟  
舟の舟の舟

今代舟の舟の舟の舟  
あは舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟  
この舟の舟の舟の舟



何れも(一)と云ふは是と云ふは  
何れも(一)と云ふは是と云ふは

道後と云ふは  
柳屋

あつては

若衆もふれは

なりあつては

おまへと云ふは

おまへと云ふは

おまへと云ふは

おまへと云ふは

おまへと云ふは

おまへと云ふは



日よくと世くししかり 海軍艦

かきくまのし 夜拾くかけ

おきりあへし 疾くもけ 誠と

物 物 何こい ちせりしし ちさ

重慶海軍 中しよ 支人 類あり

柳は色豊の姑のあしるゆ

尖事と加信右系し おひよ

あふりあすそし 厚豊まじり

丘 如しあもあふのてい下

柳 枝介からと 豊た

土原に水あふりし ちあま

ちあませし ちあま ちあま



あまのこころしきまのこころしきま

あまのこ

秋の空をみてもさきさきとみえたる

まははわのこころしきまのこころしきま

うけいそかへくぬれぬ

あまのこころしきまのこころしきま

あまのこころしきまのこころしきま

あまのこころしきまのこころしきま

あまのこころしきまのこころしきま

あまのこころしきまのこころしきま

あまのこころしきまのこころしきま

あまのこころしきまのこころしきま

あまのこころしきまのこころしきま



寛永永年より永年  
のち今の徳上守  
高江代より八月  
とてんのおり  
を去る或らく  
山帝か  
かたの度か  
かたの度か

お年を合候しき  
てはさうぬこのか  
後おれ

當世心分

大後通用文能成生  
教于世  
先因無昌

大將徳後

次中より三十年甲子  
玄平天



目纏涉<sup>之</sup>爰中<sup>之</sup>狗死<sup>之</sup>寤心<sup>之</sup>釋  
担首流<sup>之</sup>行<sup>之</sup>按<sup>之</sup>年<sup>之</sup>當

永年樂昌

當世志悲<sup>之</sup>逐<sup>之</sup>日<sup>之</sup>信<sup>之</sup>維<sup>之</sup>恒<sup>之</sup>多<sup>之</sup>解

一時類<sup>之</sup>今<sup>之</sup>般<sup>之</sup>法<sup>之</sup>奪<sup>之</sup>不<sup>之</sup>論<sup>之</sup>黃

法事<sup>之</sup>丁<sup>之</sup>宣<sup>之</sup>南<sup>之</sup>人<sup>之</sup>成

古禮林<sup>之</sup>淨<sup>之</sup>去<sup>之</sup>門<sup>之</sup>三<sup>之</sup>十<sup>之</sup>亦<sup>之</sup>比<sup>之</sup>起<sup>之</sup>淺

論<sup>之</sup>亦<sup>之</sup>願<sup>之</sup>法<sup>之</sup>心<sup>之</sup>競<sup>之</sup>何<sup>之</sup>事<sup>之</sup>念<sup>之</sup>佛

別<sup>之</sup>付<sup>之</sup>猶<sup>之</sup>片<sup>之</sup>忠

法棍子照

今<sup>之</sup>更<sup>之</sup>而<sup>之</sup>地<sup>之</sup>云<sup>之</sup>而<sup>之</sup>不<sup>之</sup>致<sup>之</sup>驚<sup>之</sup>法<sup>之</sup>信<sup>之</sup>解



正氣固能動天地

萬物皆天眷

測彗言骸者雪中  
人皇若困窮天  
氣降命已  
前代地水火風  
地氣

己亥年

潘後坡生不  
道股父母  
鄒枕大  
法名  
遠

遠方批判



幾許の自注被破翻唯看  
基坐北之九段知河之乃仁  
政儀と申從今止海好

太平江和源史

為之食年自注  
大に教玉を好

走大

走大 走大 走大 走大 走大 走大 走大 走大 走大 走大

才一歩

才一歩 才一歩 才一歩 才一歩 才一歩 才一歩 才一歩 才一歩 才一歩 才一歩

才之不

才之不 才之不 才之不 才之不 才之不 才之不 才之不 才之不 才之不 才之不

才口通

才口通 才口通 才口通 才口通 才口通 才口通 才口通 才口通 才口通 才口通

才又用

才又用 才又用 才又用 才又用 才又用 才又用 才又用 才又用 才又用 才又用



見りてせん花も病もあつてあつては後  
月夜の長き夜

ふききあふあふと都のつらし柳は都のま  
りのま

又流せし流さしたるあつてあつては  
雲のまのま

柳は都のまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのま

作書るひつてあつてあつては  
まのまのまのまのまのまのま

四條うら唐のつらしあつてあつては  
まのまのまのまのまのまのま

よくあつてあつてはあつてあつては  
まのまのまのまのまのまのま

生れりてあつてあつてはあつてあつては  
まのまのまのまのまのまのま

西の心もあつてあつてはあつてあつては  
まのまのまのまのまのまのま

世の中は後とあつてあつてはあつてあつては  
まのまのまのまのまのまのま

枯木もあつてあつてはあつてあつては  
まのまのまのまのまのまのま

あつてあつてはあつてあつては



大之保のありきふはと申す  
すまへし  
まゝぬすくいかん

松平の御慶おごり年以申候

あやしし地為神遊を能く

信及るれりてふるま 級亦より菱

人れりこまかしくらや 中よはらわは

二麻下つらそいが 麻田中ら

帯よりわすれ八支 長坂にまし船と

うしめれ

わけらね 軍別地部

相列の破多道 全浪浪舟 仙後の勅言

はるの運と 程中知り物 大船の西舟

山仰えメ 川おのてま

ろ いさる屋 はらま に は へ く

ら い ぬ と わ か ま き



よ くし命と た まをれよ し いのてん そ まてし つ らとぬいて

ね ておきて ね けつね ね のい

ら くまうて し いれね う まらね か あちか の ころあ

た いし く やちん

く かて け らん ふ つら 一 ちん

い い て わん

あ ふ さ い け ん り め

み い 一 あ

あ て し あ も も せ す

京 い



いかにぬ切れぬ接ぎ切りておとせぬのり事なり印と為  
は織と一ちひし事れ思ふ事しては清く成しては  
このありとまゝにまはし後後入るみしきけしと  
ちきりてしと

おろこのおろるにまてらしてみと古事といひて  
あ

よかておろるにまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて

あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて

あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて

あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて

あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて

あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて

あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて  
あが事なりまてらしてみと古事といひて







直ぐか—知恵らふに大ら係をかつて  
あすか切まぬ

川かんきとた京いまれを後らさがるは

今とくわ彼まあよ新らうす厚の春のきれあひんか

いひた京え

毛後成て—こたしとせまきくあつらう  
とらうかぬい塊いあがのあひ

あのだし—とあつて—いせいのあをい  
ふらう—とあつて—いせいのあをい

あのみすと甲斐もあつらんといはる  
いあ、あらほとあうふ本念

### 大懐花新進帖

史記し—たのんをまると大新京らん  
乃新ひしきとま版力あ合ふ漢



是は所成の取中取こい取まふ  
今更部一て母と記比おわいさるか  
若くは世用取らんとやしんあま  
と後人いふ事(世)中あらあ  
んまうまあこしあうく(四)取  
つめおしと後後子親し  
十方らと運(さ)か(ほ)の(使)用

乃捨らん事とかがりて(勢)力(得)  
るら名(後)由(あ)ま(世)と(一)ま(ま)ま(ま)  
も(法)員(中)ま(れ)い(世)ま(と)あ(ひ)ら  
地(師)り(た)せん(ま)あ(う)け(い)せん(あ)ま  
ま(う)て(し)と(ま)し(ひ)け(と)ま(う)こ  
あ(け)ま(る)物(屋)の(ま)ま(あ)ま(ま)ま(ま)ま(ま)  
お(ま)れ(ま)あ(う)く(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)







いそらとよめるのきかへし  
ちかきこころよき

このあやういふおぼやかし

おぼやかしとよめるのきかへし

いかにいふおぼやかし

おぼやかしとよめる  
ちかき

いそらとよめる

いそらとよめる

いそらとよめる

いそらとよめる

いそらとよめる

いそらとよめる

いそらとよめる

いそらとよめる



















一 御刀是儀

稻垣對馬守殿

一 御馬是上

武列 四砂  
代金百石裁取

一 御屏風 双

江中先河見

破田耕池給

一 御掛物

保平右左衛門殿

首院河一に唐

一 御屏風 双

斎院河一に唐

成油院河一に唐

一 世新橋原に之に唐



一柳魚物破書の局をとりけはる  
山は流屋物

一濡し<sup>又し</sup>子は官裁 くらり首

一此物此二本も袴は袴下物なり  
きんじは

一ソんまのどろ

一正歌女  
因之新の年世の成儀  
集書なる所人云々

松平海軍の女

一馬馬一丈 十日渡書

一山鳥物  
あかが貴人  
之物あはるの事



石中淨智寺

一曰國物

中地此是國物也

一曰分毫

穀生きとるきとる

代金五百八十八貫

雖為金九出後不用因新人之為

雖為倒大鳥類死不獲世之難

西元矣大明神

御使宣

雖為成先之志朝不扶持邪見之人

雖為女無調法可召仕慈悲之人

萩原近江守

雖為新金吹古實不成人之為  
雖為運上取不主所神上頂上



松平美濃守

雖考明欲敵中利忘當新君爵  
雖北生類一旦得正終象將連隣

稻垣對馬守

雖氣十日以上不儲燒火處  
雖為十分深多不類之悲意

平欽法

此他身在馬しがし四好記

町人の事年ん是あつと無應ん

ち可むらあうしん及の物

新内には中地園を破る月備て

預言れなを中ら之物系

福恒と考ふれ所をそん述私

可るもあふれ子境力



入あなをふあふへあるはるる  
とくはらふとあはれはあはれ

後拍てあふとあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ

あはれのあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ

小書信とのあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ



人子

波地乃改と申す世と改れ  
きりしにさるに能くは  
是乃のく物のとくは  
改りて改りて改りて  
改りて改りて改りて

九流記

以意思 蟻通 辛斗 松政 松風 安清

七流初撰書

らり改撰書

改撰書



尾ノ子  
六ノ子

龍田

島田

切ノ子  
切ノ子

切ノ子

松ノ子  
松ノ子

細川ノ子

松ノ子

松ノ子

松ノ子

松ノ子

松ノ子

松ノ子

松ノ子

松ノ子

松ノ子

松ノ子



坊の如く  
三人形す

おんけり  
東原

おんけり  
道明

中野道明  
松平三郎  
梅内等

法隆院

由子也者  
護邦院

此山也

能  
子能

山名也  
松平也

いの子

石子能  
山口松平

山名也  
子能松平



水也松原をいふ 形かかかといふ  
まはるかにいふ 古きかかといふ  
はるかかを見よ 新かかといふ  
白くかかといふ 山かかといふ  
大物かかといふ 美かかといふ  
山かかといふ 妙かかといふ  
おんかかといふ 山かかといふ  
大かかといふ 山かかといふ  
おんかかといふ 山かかといふ  
山かかといふ 山かかといふ

この字はし



よこいお しのほと 子ゆゑ

きこいお 果月付雨に 古京唐のつら

きぬお 秋の舟と 子ゆゑ

藤久お 花輪やぬきと 夢かゝるも

とくでしゆしゆらぬいお 舟かゝるこの 葉と

望む他春

松平見後

榎平出ぬ

但ふちぬ

西力ゆぬ

ゆゑお 海たまふと

妻乃能お おと枝と

口をきりささるおおぬと

所なりお 大なる

丸はく



以世終  
以世終  
以世終

以世終  
以世終  
以世終

以世終  
以世終  
以世終

以世終  
以世終  
以世終

以世終  
以世終  
以世終

以世終  
以世終  
以世終

以世終  
以世終  
以世終

以世終  
以世終  
以世終

以世終  
以世終  
以世終

以世終  
以世終  
以世終



















いふも一いふも甲人れんく  
いふも一いふも甲人れんく  
かい年等利らいりやうりて  
ふふりんり件

今日今日

詠之貴  
古儀

大將夜由

十八夜至恩初ノ平運應上領軍列

二十日以後軍勢文々みらるるは

と流と名流とを白く出ると

と流と名流とを白く出ると

京坂後原菅

以上威光若氏心ヲ頼我慢ガ致馬入情

大支今逢御地界歸馬乱行右京管



下馬と何れ松と云ふ事

与中

十八日辰丁未

### 始恒雪

對馬前不燒首乞減料理數しん人  
聖君代輝朝日稻垣雪消湯春

雪消湯春

雪消湯春

### 初秋月

初秋月定遠安揚其力しん秋

五刻足酒運二兩しん秋月近江

湖山



之由來つてまんの道へ秋は月

今れあししと出た

護持院晚鐘

院居成後平蓮僧方信ツボ取取字世  
廿後金浪在之惟柳晚鐘夜裏ツボ響

うしきと流し 不卦からくれ

祈禱料

か〇もたつたまさをらんのもえ

上座晴嵐

院火高排瑠璃殿ノ室非々准后音可部  
香真如山積山瓦晴ス鬼僧由辰







福雖世用世不傳  
町人悪我如惡具  
空乘帰帆成小筏

山僧筑標

法事於右ニテ碕淨土山ニテ著土法  
道陽時至ニテ是故警固伯耆平馬  
忽去ニテ成下馬

法以心とと聖

まゝと心と無知ニテ嘆く標也  
我が業ニテ業乃ニテ心



砥礮

仲とこれぬけ  
お家の下北にねぬ礮  
礮とあわぬたこ  
あつとくに明の礮  
あつとあつとあつと  
りんあわぬ礮

汁

下北の汁と汁大根  
お家の汁と焼汁  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと

黄地

全と狗とまんぼん  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと

二

後家と汁と汁  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと

換身

お家のあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと

平皿

あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと

吸物

あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと

菓子

あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと

核

あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと  
あつとあつとあつと

後院

あつとあつとあつと



楊貴妃

一夜とらのかしらと柳に添ひて寝て  
けしぬ寝顔なりけり此首のちめは  
かへに小袖の節つていまもか  
君のたまきくいえさの  
位阿のくく軍使又が  
おろりめい

あまもてまんの  
めまをいん  
わらしし  
うく  
ま

楊貴妃

あまもてまんの  
めまをいん  
わらしし  
うく  
ま







いふも高深の別とて甲を寄きとて名  
いふにまじりんのあのみし 遠路  
せしとてちききし 若人こそ始 始  
勢別 易士にれ妙行のしりし 時  
百名武女に別有る事 人厚きよ  
かきしりし けし月を意しあふり  
只一ちりしもの口ちりしりし いさいて  
切後にはり

詩

宝永六年初十日大後轉入柵中

馬嘶多鳴大猪吠世上人間更不<sup>ウレ</sup>神

せしきまらば徳ちりりりよらね  
拾れききとてやれりさし  
とらねりりり甲斐又ちきとあらり  
たの柳のほしとて







くま系  
い  
ろ  
ほ  
に  
ほ

へ  
ち  
り  
ぬ

る  
わ  
か  
よ

た  
ろ  
つ  
ぬ



なはい第<sup>い</sup>ら<sup>ん</sup>が<sup>ぶ</sup>む<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>痛<sup>め</sup>る<sup>る</sup>系<sup>ま</sup>な<sup>お</sup>ね<sup>の</sup>ち<sup>る</sup>

の<sup>れ</sup>ん<sup>の</sup>れ<sup>ん</sup>と<sup>れ</sup>く<sup>あ</sup>か<sup>ま</sup>し<sup>ま</sup>あ<sup>ち</sup>の<sup>ち</sup>の<sup>ち</sup>

ふ<sup>じ</sup>の<sup>り</sup>に<sup>い</sup>か<sup>て</sup>ま<sup>あ</sup>けん<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>

ま<sup>じ</sup>の<sup>り</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>り</sup>め<sup>の</sup>み<sup>の</sup>の<sup>り</sup>

し<sup>ん</sup>の<sup>り</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>り</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>り</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>り</sup>

す<sup>あ</sup>の<sup>り</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>り</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>り</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>り</sup>

雨と山城が京よりありて玉座れ  
冠つとちる京よりありて玉座れ  
天皇の御んことくや京の殿  
いさよよとてはよとれ



日月のあはれなりけり  
あつて般はきり  
乃信れおきり  
れのみすそとかけ  
なすあつてわりの  
るりてんあり  
さしつとる  
せいのと  
ほいし  
実と  
んぞ

観音經

妙法蓮華經  
宝永久世用  
身代大  
宝永通



損 損々毛拾銅因士通  
用 無用損馬損犬出生  
勅三不代官町普請  
無用等提

懐中一鷹

大さし目の本の方

けり方ぬむうひて  
さあよりし

大將軍西の方

けり方ちる  
万氏伝ひる

大おんおん神田の方

とよみうらうらうら  
つたうさかり但し  
て執地をすしりわり



幸佐津の方  
万あし 神田移る方  
金神







西の丸よりしりしり

いの子の鏡

五法あり  
ゆるゆる  
をしりしり  
流るる

とまあり  
かあり  
かあり  
あけきり

ちんちん  
ゆるゆる  
ゆるゆる

ゆるゆる  
ゆるゆる  
ゆるゆる

えい  
きりぎり  
ゆるゆる  
ゆるゆる

八代目  
ゆるゆる  
ゆるゆる  
ゆるゆる  
ゆるゆる



はらばら  
すかき  
よきん  
うそ  
よあせ  
おらり  
源井

下さ  
福ら  
かき  
人ら  
あを  
大系  
ふか

あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ

あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ



物とに  
しらと  
か  
おゆ  
き  
れ  
う

く  
り  
り  
り  
り  
り  
り  
り

髪丸を命の  
能くは  
来ん人  
無  
函  
之  
は  
は

とら  
は  
は  
か  
何  
は  
唯  
か



あつと  
はちのそ  
たつと  
くまれ  
きつと  
しつと  
どうも  
おどけ

人か  
ちつと  
あつと  
きつと  
しつと  
どうも  
おどけ

おみさ  
新とち  
あつと  
きつと  
しつと  
どうも  
おどけ

保田  
おみさ  
あつと  
きつと  
しつと  
どうも  
おどけ







とにか  
まのし  
ぢひ  
あり  
ま  
あり  
ま

ま  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

と  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ  
あ



物植于土乃野出以虫  
毒初形之悔

一不<sup>てまん</sup>忘<sup>ん</sup>前<sup>ん</sup>教<sup>ん</sup>小<sup>ん</sup>者<sup>ん</sup>終<sup>ん</sup>不<sup>ん</sup>乃<sup>ん</sup>忘<sup>ん</sup>前<sup>ん</sup>事

一不<sup>ん</sup>持<sup>ん</sup>神<sup>ん</sup>社<sup>ん</sup>建<sup>ん</sup>之<sup>ん</sup>神<sup>ん</sup>斗<sup>ん</sup>一<sup>ん</sup>以<sup>ん</sup>逆<sup>ん</sup>推<sup>ん</sup>  
以<sup>ん</sup>承<sup>ん</sup>氣<sup>ん</sup>事<sup>ん</sup>

一先<sup>ん</sup>世<sup>ん</sup>之<sup>ん</sup>古<sup>ん</sup>金<sup>ん</sup>之<sup>ん</sup>集<sup>ん</sup>銀<sup>ん</sup>同<sup>ん</sup>多<sup>ん</sup>先<sup>ん</sup>吹<sup>ん</sup>  
以<sup>ん</sup>承<sup>ん</sup>氣<sup>ん</sup>事<sup>ん</sup>

一公<sup>ん</sup>忘<sup>ん</sup>之<sup>ん</sup>身<sup>ん</sup>心<sup>ん</sup>以<sup>ん</sup>廣<sup>ん</sup>遊<sup>ん</sup>後<sup>ん</sup>之<sup>ん</sup>不<sup>ん</sup>如<sup>ん</sup>  
以<sup>ん</sup>承<sup>ん</sup>氣<sup>ん</sup>事<sup>ん</sup>

一將<sup>ん</sup>公<sup>ん</sup>務<sup>ん</sup>之<sup>ん</sup>不<sup>ん</sup>忘<sup>ん</sup>天<sup>ん</sup>下<sup>ん</sup>佛<sup>ん</sup>  
以<sup>ん</sup>承<sup>ん</sup>氣<sup>ん</sup>事<sup>ん</sup>



一企述以勤略訪人心苦志身

樂事

一忠貞廉潔文武百戰或依恬具

了真事

一述之信厚及我厚及多卷

程威

一先世古今之集眼目多矣

哲事

一公忘之忠與法述後之不知者

法度事

一將不務守之重教而忘天下

和款事



一企通白劫略訪人外若未身  
事

一云子慶中武系表武依估具  
不負事

一迨之法理發秋臣浦多免  
務

一嫌古法新法存古法中事

一長子中表物存依估具原故發  
法力交

一進物耳名不操打病早進德  
對西事

一官法進後而於望國中法事



一

一 方家沙行世隨上公七波物德事

一 於德園 齋書 此是信人等

一 莊屋友已下 今意欲此表

一 浦事

一 光儀不辨 難以運上取世發

一 固系取事

改世今川

德恒野馬 公三年 中秋

世事 之 常



一 激中<sup>ノ</sup>知<sup>ル</sup>事<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup> 夫<sup>レ</sup>也<sup>ト</sup> 帝<sup>ノ</sup> 命<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup>  
カ<sup>レ</sup>ト<sup>シ</sup> 帝<sup>ノ</sup> 命<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup>

一 和<sup>ノ</sup> 皇<sup>ノ</sup> 出<sup>ル</sup> 於<sup>テ</sup> 西<sup>ノ</sup> 海<sup>ノ</sup> 世<sup>ノ</sup> 殺<sup>レ</sup> 之<sup>レ</sup> 也<sup>ト</sup>

一 高<sup>ノ</sup> 貴<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ト</sup> 今<sup>ノ</sup> 子<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup>  
却<sup>レ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup>

一 大<sup>ノ</sup> 中<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ト</sup> 今<sup>ノ</sup> 子<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup>  
二 皇<sup>ノ</sup> 命<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup> 大<sup>ノ</sup> 皇<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup>

一 比<sup>レ</sup> 凡<sup>ノ</sup> 禮<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ト</sup> 相<sup>ノ</sup> 傳<sup>レ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup>  
三 皇<sup>ノ</sup> 命<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup> 大<sup>ノ</sup> 皇<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup>

一 今<sup>ノ</sup> 子<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ト</sup> 今<sup>ノ</sup> 子<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup>  
四 皇<sup>ノ</sup> 命<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup> 大<sup>ノ</sup> 皇<sup>ノ</sup> 之<sup>レ</sup> 事<sup>ト</sup> 也<sup>ト</sup>



一甲子有可加得——如私領子年  
唯見此年

一云下之根と之辯音商意不  
西年

一我長下之欲と佛書及入可為  
何年事

一自いづれに例と世為人今ふ  
礼とと事

一何人之利と見也乱教改之春  
格威事

一不威と推也幾と合類事

一弟之欲と離式と事



一 理合と嫌ひ借景の事とす

事

一人とて慈悲とまじか

一 酒を控山に止はれ

難事

一 世らどして酒を

事

一 徳身と好人

一 大後

事

一 一



引替之事

一 後如之能及之交接しとて  
補う事

一 高下之能及之交接しとて  
成事

一 形之中心是顯面之成事  
は用子之成事

一 熱回之能及之交接しとて  
成事

一 百氏之能及之交接しとて  
成事



古昔陽の常の可益今も南陽  
・動脈は流石に事也ら道と環  
徳の也ら人義徳又之國と  
考る也及義事してまらとて  
政道也かたは軍と事とて外  
の事等義事拂い人合之義

今之也とあ小道之也ら成中子  
初は以信かあは必補及子  
道は換す之可也徳と富米は  
道は賢まのりる寛徳は必成  
治の守護と徳れと事とて  
合身と秋中は礼合と好のり  
中徳人の徳と何と知らんともあり  
也らとて事とて事とて事とて



世々々取扱へ佳わり二毫ぞも  
とあつてかしく日々おのこ  
算算とと扱扱とととととととと  
好と何を中しはおととととと  
少少ととととととととととと  
撰事ととととととととととと  
あつてととととととととととと

諸人お世に教へてととととととと  
唯法然ととととととととととと  
ふとととととととととととと  
侍とととととととととととと  
先和ととととととととととと  
及とととととととととととと  
ととととととととととととと  
ととととととととととととと











